

MfG_J_Koyama_Shotaro.ppt



長岡の美術 小山正太郎

2022年7月10日 改訂 春日

- (1) 父の小山良運
- (2) 県立近代美術館に代表作「仙台の桜」
- (3) 美術の教育者、行政者としての姿
～画塾、文展、阪之上小の教科書
- (4) 評価の分かれ目とは
- (5) 「論語と算盤」に縁あり

2021年9月16日 春日

2021年NHK大河ドラマ「青天を衝け」、
（「蒼天を衝け」）の主人公・渋沢栄一の言葉
「論語と算盤」誕生に、長岡出身の二人、
小山正太郎、福島甲子三が関わっています。

しかも、山田方谷を師とする三島中洲が、
この言葉の命名者とされています。
悠久山の河井継之助顕彰碑の撰文の作者です。

驚いてしまいます。
長岡ガイドの、最も旬な話題と思います。

渋沢栄一「論語と算盤」 関連人物

小山正太郎 小山良運の長男、画家、教育家
福島甲子三 悠久山に碑、令終会幹事

三島中洲 河井継之助顕彰碑の撰文
山田方谷に陽明学を学ぶ

尾高惇忠（じゅんちゅう） 論語、剣術の師

ゲストへの伝え方 ① 長岡市民、② 県内・全国

小山正太郎(1857 - 1916)

小山良運の長男として、長岡で生まれる。
明治時代の日本の武士、洋画家、教育家。
実作者としてよりも教育者として名高い。
東京師範学校(現・筑波大)図画教員。
図画調査委員、図画教科書編纂委員など、
図画教育の普及

晩年には、文部省美術展覧会(文展)を創設、
審査員を勤める。

(1) 父の小山良運

本名・小山善元(ぜんげん 1827-1869年)

越後長岡藩の藩医。通称良運。同藩拔擢家老の河井継之助の藩政改革のブレーンの一人。

代々、越後長岡藩(藩主・牧野氏)の藩典医で、江戸中期に鍼灸師から取り立てられた。

小山良運は、緒方洪庵(適塾)に学んだ蘭方医であった。

河井継之助(1827- 1868年10月)

長谷川泰(1842- 1912)

(2) 県立近代美術館に代表作「仙台の桜」

1881(明治14)年 キャンバス, 油絵具 39.5 × 60.8cm



「仙台の桜」 新潟県立近代美術館の説明より

師フォンタネージからの直接の指導を離れ、後任教授の教育法への不満から工部美術学校の仲間達と退校し、十一会で研鑽している時の作品。中央の道を挟んで桜並木が続く一点透視図法の構図は、小山の鉛筆画にも多く見られる構図です。全体に褐色の色調でまとめ、遠くに広がる空を明るい色で奥行きを出し、師の自然主義的な画風を忠実に継承した作品と言えます。

アントニオ・フォンタネージ(1818～1882,
1876-78に来日、教授。イタリアの風景画家)



ブジェイ高原 (1858-60) 県立近代美術館蔵

(3) 美術の教育者、行政者としての姿

明治9年(1876年)、工部美術学校開校と同時に入学。

フォンタネージの指導を受け、翌年、門下生中で最優秀、助手となる。

同11年11月、フォンタネージの後任の教育法に不満を抱き、仲間と共に退学を、浅井忠ら連袂退学者と十一会を結成する。

同12年東京師範学校(現・筑波大)図画教員となり、以後同17年図画調査委員、20年図画教科書編纂委員になるなど、図画教育の普及に尽力する。

同40年、文部省美術展覧会(文展)第一回から審査員メンバ。

明治20年(1887年)に十一会から発展解消した画塾「不同舎」を主催。

後進育成に努め、最盛期は300人、中村不折、満谷国四郎、青木繁、坂本繁二郎などを輩出。同22年、明治美術会を浅井忠らと創設。

小山は、人によって指導の仕方を変え、自らの作品に弟子達が影響を受けないようにするため、自筆の油彩画を見せることは殆どなかったという。後進の育成に力を注いだため、油彩画の現存作は少なく鉛筆による風景写生図が多く残る。

小山による図工教科書で「小學習畫帖」とある。
明治36年刊。 掲示にあるように、当時の授業は、
教科書
の絵を
そのまま
模倣して
描くよう
指導した。



阪之上小学校・伝統館蔵

(4) 評価の分かれ目とは

小山正太郎は、何故かマイナーです。

同じく、長岡出身の彫塑家の武石弘三郎、
小説家の松岡譲も、何故かマイナーです。

芸術家、作家の評価も、本来の作品、著述
によるだけでなく、歴史の偶然による部分
も大きいように感じています。

これは、私の想像に過ぎないですが。

・小山正太郎

小山正太郎の「書は美術ならず」という論文(1882年)に対して、岡倉天心が反論を加え、大きな論争に発展したそうです。

難しい問題であり、実際、現代書家であり書道評論家でもある石川九楊氏も、「この論争はまだ決着がついていない」といい、これが大方の識者の見解とのこと。

小山正太郎の考えは、

『「書」に感動するとは云え、それは書かれている語句つまり言葉に感動しているだけのことであり、「書」は美術ではない。』

・岡倉天心の考えは、

『文字の一点一画、大小、配置、造形に至るまで、「書」には工夫する余地があるのだから、「書」は美術と考えていい。』

～ 私の気持ちとしては

「書」を、どう定義するか、という問題であり、今後も決着することはないと思います。ただ、当時の「書」は、現代の芸術の一分野として確立している「書」と、ずいぶん違うのでは、と感じています。

当時の日本の美術再評価の恩人であるフェノロサ、そこに繋がる美術界のリーダであった岡倉天心に逆らったということで、小山正太郎の画家としての業績評価に少なからず影響があったことも事実のようです。

洋画界のライバルに、黒田清輝(1866-1924)。

ただ、極めて難しく、ドロドロしたものであったようです。

歴史的観点、権力闘争の観点からの美術史

新政府の、新しい日本の立ち位置として、
国を挙げて西洋礼賛、一方で日本文化も賛美。
その一担当としての、小山の微妙な立ち位置。
それに対峙するフェノロサらの、日本文化の
独自の評価、政治的な思惑を含めた立ち位置も。

美学、及び脳科学的観点からの、本質論も
今と、1世紀半前とは、大きく異なる状況

特に、「美とは脳のどこが感じるものか」、と
いう、見方。

a) 以前は、脳 = 大脳皮質

b) 最近のは、脳 = 感覚情報の情報処理
その情報処理にも、個人の個性。

(5) 「論語と算盤」に縁あり

小山正太郎、福島甲子三という、長岡出身の二人が、渋沢栄一の「論語と算盤」誕生に、大きく関わっています。

しかも、山田方谷を師とする三島中洲が、この言葉の命名者とされています。

驚いてしまいます。

長岡ガイドの、ホットな話題と思います。

論語と算盤図／小山正太郎画（渋沢史料館蔵）
以下、二松学舎大学ホームページ説明などより

渋沢栄一が明治42年に古希を迎え、関係していた企業の役員を殆ど引退するにあたり、当時東京ガスで渋沢を補佐した取締役の福島甲子三が、それまでの渋沢の実績を、有名な書家や画家に描いてもらい、二巻の書画帖を贈った。
その中に洋画家の小山正太郎が描いた一枚の色紙があった。



論語と算盤図／小山正太郎画（渋沢史料館蔵）

論語算盤説の由来

「論語算盤説は、福島甲子三氏が先生に進呈せる書画帖の中にある、小山正太郎画伯の筆になれる絹帽と太刀、論語と算盤との図を見て旧師三島中洲翁翁の作れる所にして、これより所謂論語算盤説有名となれり。」

『竜門雑誌』*山田濟齊**の演説

*竜門舎は渋沢栄一記念財団の前身

**二松学舎専門学校の初代校長であり、
「西郷南洲遺訓」の編者

“論語を礎として商事を営み、算盤を執つて士道を説く
非常の人、非常の事、非常の功” 明治42年

渋沢が明治42年に古希を迎えた際、ほとんど関係していた企業の役員をリタイアするわけですが、当時東京ガスの取締役をしていた福島甲子三が、それまでの渋沢の実績を、有名な書家や画家に描いてもらい、一冊の画帖を贈りますが、その中に洋画家の小山正太郎が描いた一枚の色紙がありました。

ここで描かれているのは、朱鞘の大刀とシルクハットと白手袋。まさに武士道と紳士道を兼ね備えた人として渋沢を現し、そこに論語と算盤が描かれています。この絵を見た三島が、渋沢に文章を贈っています。

その後、渋沢は「論語と算盤」というタイトルで講演をしたり、文章を書き始めたりしますが、最初に必ず「小山の絵と三島の文章をもらって、私はこの言葉を気に入っている」とそのいきさつを述べています。

(二松学舎大學 HPより)

二松学舎は、山田方谷に陽明学を学んだ
三島中洲(ちゅうしゅう)が明治10年、官を辞し
「漢学塾二松学舎」を創設した漢学塾。
渋沢栄一が第三代学長。栄一は幼いころから
論語を愛読、これが中洲の思想とも符合、たび
たび歓談。河井継之助顕彰碑の撰文の作者。

福島甲子三は、長岡生まれ。都庁で行政官の
経験後、東京ガスに転じた。後、宝田石油経営
に参画。令終会の活動でも貢献。悠久山に碑。

「論語と算盤」から「道德経済合一」へ

(1) 道德＝経済説

- ・道德なくして経済なし

(2) 経済＝道德説

- ・経済なくして道德なし

「経済を追求すること、そうして人々を経済的に豊かにすること、これこそが究極の道德だ。
だから、経済活動なくして道德は実現できない。」

「真正の国家の隆盛を望むならば、国を富ますと
いうことを努めなければならぬ。国を富ますは、
科学を進めて、商工業の活動によらねばならぬ。」
～これが500社を超える会社設立の原動力だと思います

※ 合本組織 ≠ 株式会社

合本組織の使命は国の利益、即ち
公益を増加させることである。

● 知りたいこと

小山は、渋沢と画の主題について、打合せたに
違いありません。どんな話をしたのでしょう。